

巻頭の言葉

京都文教大学人間学研究所所長 西川 祐子

京都文教大学が開学十周年をむかえたと同じく、同大学の人間学研究所もまた次の新しい周期に入りました。このような時期に研究所所長をひきうけるにあたって、任期の2年間でどう充実させるか、悩みながらたてた方針は以下のとおりです。

1) 研究所10年の研究活動の蓄積と学内のいわば文化資産を生かす企画をたてる。2) 人間学部が3学科に拡大し、研究領域がふえて多彩になった研究者たちの研究活動をつなぐ共同研究の支援をできるかぎり有効に行い研究活動の活性化をはかる。3) 本研究所の学内的位置づけと諸部署との連携、学外の諸研究機関との関係性、地域における役割を意識した独自の発信を行い、小規模ながらユニークな研究所の存在を示す。

幸い、人間学研究所の三つの共同研究「『近代』における『制度的知』と『異端』の対面」、「物語と現代社会」、「ニュータウンのある『まち』」は報告にあるように活発な活動をつづけました。成果の一部が論文とシンポジウム記録となって本号に掲載されています。共同研究はいずれも学際的な幅広いテーマと取り組んでいます。現代の大学は専門化がすすむ一方で総合的視野にもとづく学際交流がもとめられており、多領域の研究者が集まっていることがひとつの特徴である本学にとって、学科、研究領域の壁をこえた共同研究の伝統はますます大切になるものと思われます。人間学研究所は共同研究に場を提供する機関でありつづけたいものです。共同研究にかかわる成果のほかに個人研究の成果を問う論文も寄稿いただき、おかげで本号は充実した内容となりました。

人間学研究所独自の取り組みとしては、「鶴見和子の仕事と鶴見和子文庫から思想と方法論

の水脈をさぐる」と題した連続シンポジウム全4回を開催しました。これは開学当時に比較社会学者である鶴見和子さんから本学図書館に寄付いただいた蔵書、フィールドノート、草稿をふくむ資料類を10年後に体系的に読み直す試みとして企画しました。

企画の段階では、鶴見和子さんはお元気で京都ゆうゆうの里で思索を重ねていらっしゃると信じていました。しかし全4回のうち第1回を終えた夏休み前に訃報に接し、またその後、ご遺族から蔵書と資料の追加寄贈をいただきました。とうぜんのことながら連続シンポジウムの位置づけもおのずと変化したのですが、わたしたちはあえて企画どおりに全4回を開催することをもって学恩にこたえたいと考えました。本号にはシンポジウム全4回の記録を掲載しています。回をかさねるにつれて鶴見和子文庫の豊富な内容があきらかになり、いくつかの重要テーマがみえてきました。同時に関心をよせてくださる聴衆、研究者の数がふえてゆきました。本号に鶴見和子追悼特集を組むゆえんです。来年度も鶴見和子文庫の扉をつぎつぎにあけてゆく試みをつづけたいと思います。

また本研究所は、2007年1月にフランスから歴史学者アラン・コルバン教授が立命館大学大学院先端総合学術研究科に集中講義のために京都へ来られた機会に、同研究科と宇治市源氏物語ミュージアムの協力をえて、『源氏物語の匂いと薫り』と題した特別公開講演会を開催しました。日本とフランスの2つの国の歴史学者たちが「源氏物語 宇治十帖の舞台」で対話する場をつくることができ、本誌に日本語とフランス語の記録が実現したことをあらためて関連機関および通訳と翻訳の労をとってくださった方々、サポーターのみなさん、多数お集まりく

ださった聴衆のみなさんに感謝いたします。本研究所としては大学研究機関として必要な国際交流と地域との交流の性格をあわせもつ活動を展開させることができたことを喜び、今後もこのような試みをつづける工夫を重ねる所存でありますので、よろしくお願いします。

なお研究所の諸活動は、よい読者と熱心な聴衆にめぐまれることが不可欠です。そのために

今年度は毎週水曜日と木曜日に本研究所所長室を開放してランチタイム・ワークショップと称し、鶴見和子文庫の蔵書を中心とした読書会などをつづけています。学部生、院生、卒業生、教職員、地域の方々などの幅広い参加があります。来年度もぜひ継続させ、なんらかの形で本誌にもその成果を反映させることができるように願っています。